

# 若神組十三日講だより

若神組十三日講  
講長 藤井 成正

こんにちは！令和の始まり、新しい時代のはじまり…。と書いていたら…。コロナ禍・能登半島地震等々、あらためて、気を引き締めて、しっかりと……。との思いが生じます。それでは、振り返って前号以降の「抜粋スポット版」のご紹介です。

## 活動のご報告

- 秋季彼岸会法要(井波) 9月22日～23日  
氷見市布施 法順寺 圓山 望師  
講題「顕浄土真実とは」 講長、事務局(中嶋)参拝・



- 第4回講員研修旅行 9月24日(日)  
「布橋灌頂会」「大岩山日石寺」「眼目山立寺」



R5: <sup>のぞみ</sup> 望どおりの晴天日、27名の参加

第1回  
(H29)  
布橋灌頂会  
ほか

第2回  
(H30)  
吉崎御坊  
ほか

第3回  
(R1)  
勝興寺  
ほか



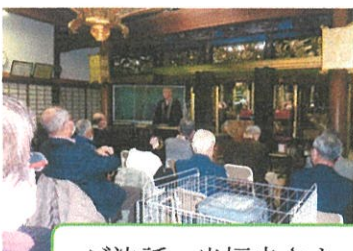
R6  
第5回  
(検討中)  
沢山のご参加を！！

- 高岡会館報恩講 11月28日  
十三日講から10名参拝
- 井波・お内仏報恩講法要 11月28日・29日  
ご法話: 増山孝琢師 藤井講長・中嶋参拝
- もち米進納・本山参拝 12月7日～8日  
藤井講長と南般若から(3名)、高岡教区全体で(34名)が参拝。



## 十三日講の定例本山活動

- ◆12月講 12月13日(水) 於: 称名寺



ご法話: 光福寺さま

○本山講 (光福寺・光圓寺・光乗寺・西照寺・称名寺さま)  
十三日講では、5ヶ寺持ち回りのお講を勤行しています。  
手持ちの資料では、昭和10年から昭和20年まで、各地区のお座のお宿名(及びお寺)の記録が残っています。  
終戦直後(昭和20年)からは、現在の5ヶ寺さままでの勤行となった事が記されています。

※ 次ページは、「お寺様との懇談会」の一部ご紹介(記事)です。

○お寺様との懇談会 令和5年12月13日 於；称名寺(講終了後)

お寺様、講長、中嶋

抜粋資料

日本においては、自然と共に、自然の近くで暮らしていた人々にとっては、絶えず自然の姿が見えているからこそ、自然のままに生きることの出来ない人間の問題も見えていた。しかも、なぜ自然のままに生きられないのかは、人間の本性に根ざしている。その本性とは、生の中に「自己」や「我」「個我」を内在させていることである。生を自己の生としてとらえ、そこから不安が生まれる。そして、そういう人間のあり方を、凡夫の姿として見ていたのが、かつての人々であった。…そして、そうであるとするなら、自然は清浄である。なぜなら、必要以上に自己を主張することもなく、春になれば花をつけ、秋が深まれば枯れる。ただそれだけの自然の営みを、不安を抱くことなく受け入れているからである。その意味では、日本の民衆思想は、他力の思想なのだと思う。自然という絶対に清浄なものを見出し、その自然の姿に導かれながら、「我」を解体していく。自然を仏とする絶対他力の思想が根底にあって、その思いに言葉を与えたものが仏教である。人の考えたことは、間違ふことがある。…

若神崎十三日講

講のSDGs①  
内山 節のご本から

2022.12

○内山 節氏(説)

それは「死生観」に変化が起こったから

伝統的社会では、生も死も個人のものではなかった。

つまり自然やそれと結ばれた神仏の世界、村の共同体が包んでいた。

かつて日本人は、自然界を清浄なもの、人間界を穢(けがれ)から、免れ得ないものととらえていた。いわば、生きることは、「自己の本質」を穢していくこととしてとらえていた。……なぜ穢れてしまうのか。

その気持ちに言葉を与えたのが、仏教である。

「煩惱」をもち、「我執」にとりつかれた「凡夫」だから、人間として生きていく過程は、霊が穢れていく過程と捉えた。

ゆえに、最後の目標は、自然に帰ることである。生と死は、自然と共同体という、包んでくれる世界があるからこそ成立する。…

それは、信仰のあり方も変えた。

包まれているもの(風土・土地・場=土徳)と共にあった信仰も、裸の個人を救済する信仰に変わった。(どのように、受け止められますか……)

事務局より

HPも是非ご覧ください。

